

9月19日 逍遙 

ここ数日、どこからともなく漂い始めた、甘いキンモクセイの香り。嗅覚が人様より敏感な猫のワタシは、強い香りが正直苦手なのですが、昔、鹿児島城二之丸があったというこの辺りで、毎年今頃になると、花言葉のとおり「謙虚」な誘いを届けてくれるので、今日の夕方はこの香りの優しさに包まれながらの散歩に。お店の前の歩道を左に出てすぐの向かい側の小路を、香りを辿っていくと、家々の並びの一角の、ワタシにとっては森のような庭木の懷に、控えめな小さいオレンジ色の無数の花達。そして、小路の先には、夕刻を忙しく刻む車の流れ。左手には、高々と静かに建つ西郷銅像。国道を挟んで向こう側には、小松帯刀の像も。それらのどれもが、幕末の頃も変わらなかったであろう城山の山の端にかかる杏色の夕陽を浴びて輝いています。

逍遙館長さんは、「ここに来るといつも思うのは、薩摩藩内の実権を握った国父・島津久光、そして小松、西郷それぞれの生き様と、彼らお互いの偶然の巡り合わせが醸し出す歴史の不可思議さかな」としみじみ呟いていました。

次回「二之丸跡 静かに無常を語る、のこころ」

鹿児島城

二之丸跡に

誘われて、のこころ

